Osaka University Knowledge Archive

Title	多元的状況におけるアイデンティティの変容 : 滞日インドネシア華人を対象とした分析
Author(s)	中谷, 潤子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54330
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【11】

氏　　名	中谷潤子（なかたにじゅんこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２３２９６　号
学位授与年月日	平成21年６月30日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	多元的状況におけるアイデンティティの変容－滞日インドネシア華人を対象とした分析－
論文審査委員	（主査） 教　授　岩根　　久 （副査） 教　授　日野　信行　　准教授　義永美央子

論文内容の要旨

本研究では、人が社会の中でアイデンティティを形成し、それが変容する様を明らかにしようとし、日本に滞在するインドネシア華人を分析対象とした。インドネシアに生まれ育ちながら同化政策から言語文化解禁までを体験し、そのうえ海外在住も体験している彼らは、多元的状況におかれているといえる。「華人」として、そして「インドネシア人」として、更に「個」としての自己をいかに構築してきたかという点において、彼らは調査対象として適していると考えた次第である。

分析方法には、M－GTA（Modified Grounded Theory Approach：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を採用した。これは、グレイザー&ストラウスが、理論検証型の研究に対するものとして提案したグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）がもとになっており、データに基づいて分析を進め、データから抽出した概念同士の関係付けによって研究領域に密着した理論を生成しようとする研究方法で、分析の最終目標を理論を作り上げることにおいている。その中でもM－GTAは、分析に際してデータの切片化を行わないなどの点に独自性をもつ。

本研究では、社会との相互作用における自己形成とその変容についてのひとつの転換ポイントとして日本滞在をとらえ、データとしてインドネシア華人へのインタビューでの語りのみを扱った。インドネシア華人のアイデンティティ形成についてのミクロレベルでの研究がないことと、世界において多元的状況が今後ますます増えることを鑑みても、本研究は意義あるものであるといえる。収集データは、M－GTAに基づいてオープン・コーディングを行い、更にそれ選択コーディングを行うことで論理体系にまとめていった。本研究ではアイデンティティ変容を一元的な視点のみでとらえるのではなく、3つの観点から選択コーディングを行い、分析を行った。

まず、インドネシア華人の成長に伴うアイデンティティ形成を時系列で分析した。その結果、成長過程においては、言語アイデンティティ、インドネシア国内外におけるエスニック・アイデンティティ、宗教アイデンティティ、ナショナル・アイデンティティの4つのアイデンティティから自己が形成されるととらえることができた。

インドネシア華人の家庭内での言語使用や習慣保持は多様である。だが、インドネシア社会では華語の伝達機能が高くないうえ、華人を象徴する華語のアイデンティティ機能も、同化政策の中では逆にマイナス要素だととらえる人も多い。しかし、世界での中国語の伝達機能が増す一方であることや、海外の人から「華人なら華語ができるはずだ」とみられたことで、彼らが華語のアイデンティティ機能に気づき、その重要性を認識するケースがみられる。インドネシア社会に暮らす華人は、言語や習慣保持の程度に関わらず、日々の他者との相互作用から自らを「華人」であると認識することになる。しかし、マイノリティであることがインドネシア社会で有利に働くことはなく、有標な存在になることを避けようとしながら生きている。また国内から海外に出ると、国籍によって自分たちの一次的属性はインドネシア人であるとし、華人であることは二次的属性だと位置づける。ただ、インドネシアでは華人性を主張できずにいたのが、海外では華人であることがプラスイメージをもつこともあると知り、華人である自己をはじめて肯定的にとらえるケースもある。更に、外へ出たことで、インドネシア国家を構成する「インドネシア民族」としてのあり方に目を向ける場合もある。以上のように彼らは、いくつかの局面から複合的にアイデンティティを形成し、「インドネシア人」、「華人」と「プリブミ」の存在の間で自らを位置づけることがわかった。

そこで、自らを位置づける際に「異」とみなすものを明らかにするべく、再度選択コーディングを行った。その結果、まず言えるのは彼らは無標の「個」の状態であり、インドネシア社会での生活を通して、自分が華人（集団）という「異」の存在であると気づくのだということである。人口の大半がプリブミであるインドネシアで、華人とプリブミとの間に境界が発生する要因は、様々である。両者の「異」を越えることは易くはないが、「個」としてのプリブミと華人の対峙をきっかけに、それまでの「異」というマイナスイメージに転換をもたらすこともある。また、宗教とエスニック・グループが相関するインドネシアだが、宗教はしばしば民族を越える。従って、「異」はエスニック・グループを基準に発生するとは限らない。更に、同じ華人の中にも「異」は存在する。その要因は地域差と経済格差である。前者は、華人性の強いスマトラ華人、現地の言語文化に溶け込んでいるジャワ華人、大都会でのインドネシア語を共通とするインドネシア人の一員でありながら華人意識だけは強いジャカルタ華人と、3地域で「異」が見られた。また、後者については、伝統文化を保持し華人ネットワーク内で生きようとする裕福層のイメージが、時に他の層の華人をも巻き添えにし、かえって華人内で互いの差異を強調することがわかった。そのほか海外での新たなインドネシア華人ネットワーク内で「異」を感じることもある。海外のインドネシア社会でのプリブミとの付き合いや中国大陸の人との接触を通して、同じ華人集団における他者の「異」を知り、華人としての自己を見直すという経験をすることもある。

最後に、この「異」を形成する境界について注目した。まず、華語による境界がみられた。華語のもつアイデンティティ機能は、華人と「他者」に境界をもたらす。そのひとつにルーツへの気づきがある。能動的な気づきとは、華語を使用する華人に自分が触発された場合である。受動的な気づきとは、華語が華人のツールであることを指摘されてはじめて気づきが生まれた場合である。つづいて華語のシンボル機能があげられる。プラス要素としてとらえる場合は、華語を華人の象徴だとして維持、継承を希望している。マイナス要素としてとらえる場合は、華語がインドネシア社会において、華人の「異」を可視化させるものだと否定的に感じている。更に、華語を華人のアイデンティティだととらえているからこそ、華語に対して劣等感を感じることもある。なお、彼らはインドネシア語にもアイデンティティを感じていることも明らかにされた。

つづいて宗教による境界について考察した。エスニック・グループと宗教集団にある程度の一致は見られるものの、宗教集団がエスニック・グループに優先するケースも多い。宗教集団の場合は同じ（宗教的）価値観をもつ「インドネシア人」としてまとまっているといえる。

最終的にインドネシア華人を形成する境界とは、主に自分をインドネシア人であると定義し、華人であることをルーツとして2次的なものととらえているケース、「中国（人）」との「異」から「インドネシア人」という範疇に自己を規定しているケース、それから、華人であることを前提に、華人集団もインドネシア人という大カテゴリーの構成員として対等に認めてほしいと考えるケースの3パターンある。この分類はいずれも、「他者」との境界によって、他者が形づくる「自己」が私の見る「自己」として成立しているということを明らかにしたものであった。また「華人」、「インドネシア人」という場合、インドネシア社会に「集団」対「集団」として根付いているイメージが、「個」対「個」、または「個」対「個の背景にある集団」を対象とした時には、転換しう

ることがわかった。更に、海外では華人もプリブミも「集団」対「集団」としては存在せず、「個」対「個」の対峙であることも明らかにされた。

結論としては、多元的状況においてアイデンティティというのは、その時その局面に合わせて変容することが、インドネシア華人の語りから明らかになった。それは、「自己というのは、他者との相互作用において形づくられる」ということを示すことにもなった。そこで自己を見出すためには比較対象となる他者にも目を向ける必要があると感じ、「異」に注目した。自己と他者が「異」なるものであれば、「異」はどこからもたらされ、何を以て自己と他者が隔てられるのか。それを知るために、「華人」と「プリブミ」が「異」かどうかと、その要因を分析した。最後には、「インドネシア華人」を形成するための「異」との境界を明らかにした。

自己を形づくるアイデンティティは、そうでないものとの境界に注目することでその存在を明らかにする。ただし、境界といっても一本の固定された線ではなく、同じ華人同士で、プリブミとの間に、宗教集団として、言語集団として、その境界は複雑で、他との関係において引き直されるものである。形を変える境界のなかで、その都度「インドネシア華人」としての彼らが再形成され、存在している。こうして、言語、宗教、民族性などが、他との相互作用により変容していくのがアイデンティティの姿であるといえる。そして、本研究は語られた瞬間のその一片を解釈し、描き出したものであり「いま・ここ」における真実だととらえることができる。

多元的状況にあるのは彼らだけではなく、人は皆、多元的状況におかれている。人が人として、自己を問う時、それは他者との関係においてほかない。それを本研究では、インドネシア華人について明らかにしたものである。

論文審査の結果の要旨

中谷潤子氏の学位請求論文「多元的状況におけるアイデンティティの変容―滞日インドネシア華人を対象とした分析―」は、滞日インドネシア華人へのインタビューデータの分析を通して、多元的状況（文化的，社会的、宗教的な環境）の下で彼らのアイデンティティがどのように形成され、また、環境の変化に伴いどのように変容するのかを明らかにしたものである。

この論文において、中谷氏は自らが多年に亘って関心を持ち続けているインドネシアにおける華人の言語・文化の問題と「人は自らのおかれた環境の中でアイデンティティをどのように形成するのか、また環境の変化に伴い、そのアイデンティティがどのように変容するのか、そしてそれは言語や習慣の保持、継承とどう関わっているのか」という普遍的な問いかけを見事にリンクさせ、歴史的コンテクストにおいて複雑な様相を見せるインドネシア華人の言語・文化の問題をインドネシア華人自身はどのように捉えているのか、という問題にひとつの解を得ることに成功していると言えよう。

そもそも、インドネシア華人に限らず、人間の意識を偏りなく調査することは容易ではないし、その調査から普遍的な結論を導き出すことも容易ではない。中谷氏はこの問題を扱うにあたって、グレイザーとストラウスによって提唱され、その後発展しているグラウンデッド・セオリー・アプローチ（ＧＴＡ）の手法を用いている。この手法は観察し得る限定的なデータから、少なくともそのデータについては成立する理論的整合性を持った仮説を構築するための方法論である。そして、滞日インドネシア華人というきわめて限定された集団ではあるが、インドネシアに生まれ育ち、同化政策から言語文化解禁までを体験した世代であり、海外に滞在することにより、自らを振り返る機会を持ったと予想される人々をインタビューの対象として選定している。

インタビューデータの分析はＧＴＡの手法に従い多層的に行われている。まず、最初のプロセスで自己を形成するアイデンティティの要素として言語アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、宗教アイデンティティ、ナショナル・アイデンティティの４つが抽出される。そして、これら４つの要素から構成された複合的なアイデンティティにより、彼らが「インドネシア人」、「華人」と「プリブミ」の存在の間で自らを位置づけることが示される。さらに、自らを位置づける際に、どの点で他者を「同」と見なすか「異」と見なすかという観点からデータが再分析され、アイデンティティを形成するそれぞれの要素の「境界」が明確化される。データの分析全体を通じて重要な点は、アイデンティティは、その時その局面に合わせて変容し、「自己というのは、他者との相互作用において形づくられる」ことが明確に示されている点である。

上に述べたように、本論文が扱ったデータは限定的なものであるが、インドネシア華人に関するミクロレベルの研究が存在しない状況の中で本論文の先駆的意義は大きく、また適切な対象を選定し、妥当性の高い方法論に基づいてデータを綿密かつ多層的に分析することにより、通常では描写が困難な対象であるアイデンティティの様相を的確に描き出した点で本論文は非常に高く評価できる。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。